

日本へ」というものでスライドを多用して言葉の壁をのり越えるという、昔パレが使った手法を取入れたのである。二十分の講演に対して十回も拍手が湧いたのは異例のことである。

今回のパレの二つの式典に参加して、日仏両国の交流を深めることに成功した。フランスのパレ専門家たちは研究を共にすることに強い関心を示している。一方では外科と医史学の接点が確立した。これによって今後の研究や発表の場が拡がっていくことを祈りたい。

(慶應義塾大学医史学研究室)

蘭学のルーツについて

——オランダ外科医界由来の医学——

石田¹⁾ 純郎、H・ボイケルス²⁾

江戸時代の蘭学とは、周知のごとく、西洋における医学・科学・技術を受容したものである。しかし、それが西洋において、どのような社会的性格を持った科学や医学であったのか？——それを検討した研究は、少ないようである。

演者は、蘭学を伝えた西洋人、すなわち渡来オランダ人医師及び、受容蘭書のオランダ人著訳者について、プロロポグラフィ的検討(集団的伝記研究法)を行なった。プロロポグラフィとは、歴史において何らかの役割を演じた集団に属する人々の生涯を一括して調査し、共通の各項について分析し、彼等に共通の背景の特質が何であるかを判定する歴史研究の手法とされている。

一八世紀末までのヨーロッパにおいては、内科、外科、産科、薬局は、各々独立した職能分野であった。内科は学問であり、大学卒の医学者(MD、ドクター)が携わった。外科は技術であり、ギルドを形成し、その中の徒弟教育で養成された職人(マスター)が携わった。産科も技術であり、学問的基盤を持たぬ無学な婦人が、経験だけに依存して携わった。薬局は商売であり、ギルドを形成し、その中の徒弟教育で養成された商人が携わった。もちろん、各境界の医療技術については、各職種間で縄張り争いがあり、これは一七世紀には顕在化し、一九世紀後半の国家権力主導による、内科・外科・産科の統一(現在と同じ概念の「医学」の成立)まで続いた。

オランダにおいては、外科医ギルドの形成は、一五世紀後半にまで逆上れる。外科医ギルドの出現から、オランダ連邦共和国の存在した期間(一五世紀後半～一八世紀末)は、オランダの外科医ギルドは、町単位で形成されていた。医療職全体の世帯が小さかったので、大学医学教授、内科医、産婆、碎石医らとも、比較的友好的で親密な関係を保てたのが、オランダの特徴の一つである。他のヨーロッパ諸国、例えはフランスやイギリスと比較して、オランダの社会の特徴は、徹底した地方自治ということであり、各々の町が一つの独立した政権として機能していたことである。オランダ連邦共和国(一五八一～一七九五)は、各町の政権の連合体として存在したにすぎない。

一方、フランスでは、中央集権的傾向が強かった。組織も国単位でのタテ割傾向が強く、外科医ギルド・理髪外科医ギルド・内科医師会が、より広い地域、人口を単位に形成され、職能上の激しい縄張り争いをくり返している。

しかし、ナポレオン影響下における、フランスによるオランダ侵略(一七九五年のバタビア共和国政権の成立)以後、オランダでも中央集権制がとられ始め、一八六五年の法律の施行で、それは完成する。そして、その結果、医療職の医師(arts)への統一も完成する。

日本に渡来した蘭館医は、町の外科医より一段と資格の低い、田舎外科医、船医、植民地医が主体を占める。そして日本に受容された蘭書は、内科学書、薬物書も含め、町のギルド外科医のための医科学書が主体を占める。一九世紀に入ると、ライデン大学卒の医学者が、卑語(オランダ

語)で、医学書の執筆を行ない、これは町の外科医に歓迎されたが、日本にも受容された。一九世紀後半の、ウトレヒト陸軍軍医学校からの強い影響については、既に発表された(拙著『江戸のオランダ医』、『蘭学の背景』)。

従って、日本の受容した蘭医学は、オランダの外科医界の医学が、その主体をなすと結論づけられよう。

従来、日本で紹介された西洋医学の歴史書は、大学卒の内科医(MD)の歴史であり、発明・発見を中心とした内医学史(学説史)である。ギルド外科医たちは、そうした医史学書には、めったに顔を出さない。彼等は大衆の医療を受持った職人であり、こうした医療職の歴史を研究するには、外医学史的、社会史的研究方法をとる必要がある。そして江戸の日本は、オランダ外科医界の医学を受容した。それは、形而上性の強い内科医界の医学とは、異質なものであった。

1) (三菱水島病院)

2) (ライデン大学医史学)

シドニ・リンガーと治療学

栗本宗治

リンガー(ロンドン)の『治療学ハンドブック』は当時のベストセラーであった。手許の一二版(一八九〇)について考察する。

オピウムに関してハンドブックはいう「A・ウッドによる皮下注射は今や痛みをやわらげ、眠りを催し、スパズムを抑えるなどのために広く行われ、経口与薬よりもすぐれている。その作用はより速やかで、効果は確実であって、食欲を害したり、便秘をきたしたりすることはない……」。「オピウムないしそのアルカロイドは胃の痛みをやわらげる。胃癌や消化性潰瘍に、飲酒による慢性胃炎に有効である。……しばしば急性および慢性の下痢に有用である。刺激物をだした後、結核の慢性下痢、赤痢などに有効である